



TITLE:

Lexisの公共福祉観

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. Lexisの公共福祉観. 経済論叢 1921, 12(5): 801-803

ISSUE DATE:

1921-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127775>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二十卷 第五號

大正十年五月一日發行

論叢

戰後に於ける獨逸の財産税を論ず……………法學博士 小川郷太郎
利潤配分實施上の諸問題……………法學博士 田島 錦治
需要曲線供給曲線及び價格曲線……………法學博士 河上 肇
戰後獨逸の社會主義運動……………法學博士 河田 嗣郎

時論

税制整理の主要問題に就きて……………法學博士 神戸 正雄

說苑

舊岩國藩の製紙原料保護政策……………經濟學士 吉川 元光
我國在來の商業帳簿……………法學士 大森 研造
所得と勞賃……………經濟學士 堀 經 夫

雜錄

Levis の公共福祉觀……………法學博士 財部 靜治
最近我國に於ける地方費の組成と増加……………經濟學士 小山田 小七
國際勞働立法……………法學博士 河田 嗣郎

雜 錄

Lexis の公共福祉觀

財 部 靜 治

卷煙草「日出」^{セツライズ}を商賣敵としつゝ、各種の「天狗」を賣出し、國益の親玉でふ名に於て、熾んに私益を謀る者ありしは、二十餘年前のことなりしと記憶す、産業振はす企業心發達せざる所、進みて各種の事業を計畫經營し、かくて私益を謀る者多からんか、そはやかて公益と一致することもあるらん、されど前世紀に於ける、諸國經濟變遷の跡を繚ぬるに公益に背きて私利を射るに汲々たりし事例は多く、又公益を謀るの美名に隠れて、私懷を肥やせるの例も尠からず、かゝる事象を取扱ふべき、經濟學特に經濟政策及社會政策の、研究に就きて之を察するも、學者は一般に右の事實を認め、公共的效用、公共福祉、全體の福祉等、凡て公益國益を含意すへき、

諸用語を用うるに拘りなるに拘はらず、その用語の意義如何につきては、之を曖昧に付すること多し、尠くとも之を以て自明の概念視するの趣あると共に、Bentham の功利説に支配せられ、之を以て最多數人の最大幸福視する者は多し、「應用社會學により達せらるべき目的は、效用てふ語詳言すれば最多數人の最大幸福により、明確に示さる」とせる Fairchild の如きは、明白に之を表明せる一人なり、素より學者中には、諸經濟過程の研究を、他の社會的諸過程の研究より引離し、之を産業又は富に關する、一學問たらしむることゝしても、果して學問存立の效あるやと、疑ふ者を生じたと共に、交易し得べき貨物につき、貨幣名義にて測れる所を、單純に叙説するのみにては、その貨物の生産消費により、人生及人の幸福に及ぼす諸結果につき、何等有用なる知識を授けずとし、特に正統學派による、狹き經濟學の效力及有用を拒む者起れり、かの物質的幸福は人生を測るべき、究極又唯一の試金石たる能はずとし、脫俗高雅の

士は凡て、歡樂窮りなき愚者たらんよりは、哀情多き哲學者たらんことを、可とすへきことを認め、當時に於ける諸經濟學者の功利主義を、罵倒せし T. Edward Cliffe Leslie の如きは、此派の代表的一學者たると共に、古くは Ruskin も亦評論せり、『生命以外に富とすへきもの全くなし、即ち愛、興樂及嘆美の諸力を、悉く含むへき生命は然り、諸國中高貴又幸福なる、人間の最多數を育成すへきものは、最も富めり、自己生存の諸職分を、最上迄完成せしめ、人格の力とその資産の助けにより、他人の生命に裨益すること、最も多き者は、萬人中最も富めり』と、實に人生の諸過程相互間には、融即不離の關係あり、而して人生の理想としては、生活は質素に思慮は高尚にすへし Plain living, high thinking とも、唱へ得へき所なり、かく觀し來らんか、經濟學社會問題の研究上、公共の福祉何たるかの問題は、基本問題として精研さるゝの要あるを、想はすんは非るへし、人或は一切の科學的専門か、一の切斷行爲を前提とすへき

ことを認め、經濟學は國民又は社會の經濟生活を攻究すへしと説き、右の如き基本問題は、經濟學以外の學問により、闡明さるへき所なりとなすことあるへきも、その専門學理を應用し、之を土臺として、人間行動の諸規矩を立てんとする際には之を公益觀念に照し、調節又は矯正を加ふるの要あるへきは、その人も否定し得ざるへし。かゝる見地に立脚する場合、參考の價値に富める評論は、經濟學社會政策と言ふか如き、表題を有せざる著書中にも、發見さるゝこと多きや、Edmond Demolins, A quoi tient la Supériorité des Anglo-Saxons (近日に至り、邦譯として小川隆四郎氏『勝つ民と負くる民』出づ) 第三編第五章の一例に就きて見るも、明かなることを注意しつつ、吾人は今之か評論を他日に譲り、茲には單に此點に關する Lexis, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 2. Aufl. S. 26 の所説を、紹介しおくことに止む、問題を取扱ふこと深刻なりとするを得ざるも、簡明に説き出せる所は、かゝる問題の處理を、巧みに回避せんとする多くの經濟

學者と、その選を異にすを考ふればなり。

經濟學經濟政策にとりての中心思想は、原則として一つに限られ得へし、即ち出来るだけ有効に、公共福祉を助長することとなり、素より一定の場合に、眞に全體の利益現すべきもの、何たるかに就き、必ずしも意見の一致なし、從ひて又良信念の下、かゝる問題を取扱ふべき學者の仲間にも、議論の衝突は起り得へし、されど學問上にありては、利害關係者もその事に就き、學問的色彩の下に、主張しつゝあるか如く、粧ふことあるへけれど、その影響に對しては超然たること、無條件に必要な、事實上あらゆる國家に於て、經濟政策は主として、經濟的特別利益を有せる、徒黨の掌裡にあり、一徒黨のみにて獨立して、その意志を遂行するの力足らずとせんか、他の徒黨と結束して、協同の策略に出つへし、かゝる事情の下、學問は客觀的に立定せる、その信念により『しかあるへし』*Sein Solle* (近年『當爲』の譯字を、之に當つる人少からざるが如き)、『當然』とするは、層當然ならざるやと思ふ)とすへき

ものを、教ゆることに満足するの要あり、而してその教へは終局に於ては、影響なしとせざるへし、特に經濟的意義のみならず、倫理的意義をも亦有すへき、社會政策問題に關する場合に然り、否國民經濟政策につきても、原理上にありては、經濟的便否の問題に、之を限り得へきも、人の行動は凡てかゝる行動として、倫理的判斷に従ふへきにより、別に經濟的道德論 (*Volkswirtschaftliche Moralhe*) として、特に實際的な一學問を分つの要あり、自由貿易及保護關稅の論争は、道義感念に無關係たり得へきか如きも、少年職工の勞働力を、過度に利用し盡すことは、あらゆる文明國に於て、學問上志ざるへき、無私公共心の力により、之を終熄せしめ得たり、現今人口の大部分を占むる、無資産勞働階級民の境遇を、改善することは、公益の助長と、同義なりとするに至りしも、亦學問によるかゝる倫理的影響の賜なり。